



瀬田の丘

創刊 1973 年

編集・発行／カトリック瀬田教会信徒会広報部
東京都世田谷区瀬田 4-16-1



今日のみことば

復活の主日 B 年 (2024 年 3 月 31 日)

瀬田教会主任司祭 小西広志神父

第一朗読：使徒言行録 10 章 34a、37—43 節

第二朗読：コロサイの信徒への手紙 3 章 1—4 節

福音朗読：マルコによる福音書 16 章 1—9 節

「亜麻布が置いてあった」

(ヨハ 20 章 5 節)

説教

今日の福音は、マグダラのマリアが墓^{はか}にやってきましたら、墓^{から}が空っぽだったことに気づいて、ペトロともう一人の弟子に知らせた場面から始まります。ペトロともう一人の弟子は墓へと向かって走ります。先にもう一人の弟子が墓^{とうちやく}に到着します。そして、「身をかがめて中をのぞくと、^{あまぬの}亜麻布^おが置いてあった」(5 節) のです。

「亜麻布が置いてあった」に注目したいのです。

亜麻布は 19 章 40 節にある、イエスさまを埋葬^{まいそう}する際に遺体^{いたい}をくるんだ布です。ですから、その点を強調^{きょうちゆう}すると「あの亜麻布があるのを見た^{りかい}」と理解^{りかい}してよいでしょう。つまり、この時点では、イエスさまの遺体^{あんじ}がそこにあることが暗示^{あんじ}されます。つまり、イエスさまは本当に死んだのです。

つづいて 6 節では、「シモン・ペトロも着いた。彼は墓^つに入り、亜麻布が置いてあるのを見た^{しる}」と記されていますから、ペトロも「あの亜麻布があるのを見た」のです。ですから、ペトロもイエスが本当に死んだことを確認^{かくにん}します。最初の弟子は、墓^つの入口から亜麻布を見ます。しかし、ペトロは墓^つに入って、亜麻布を見ます。しかし、よく見てみると、遺体^つの頭^つを包^つんでいた布^{ぬの}はそこにありませんでした。さらによく見てみると、離れた場所^{はな}に丸めてありました。

これが7節の記述です。

わたしは、この情景描写にここを奪われます。

墓の外から覗き込んだら、布きれが見えた。

そして、墓に入ってみたら、本当に布きれが見えた。

でも、真っ暗な洞窟のような墓でよくよく目をこらして見てみると、頭を包んでいた布、新共同訳聖書は「頭を包んでいた覆い」(7節)としています、その布は少し離れた所に丸めてあった。

ペトロの目の動きが分かるかのような記述です。

そして、もう一人の弟子が「入って来て、見て、信じた」(8節)のです。この弟子の視線は、墓の内部全体を眺めています。とても躍動感のある表現にわたしには思えます。

墓を教会と置き換えてみたらどうでしょうか。

人は、最初、教会の入口から中をうかがいます。「何かがあるみたい」と考えます。そして、思い切って教会の中に入ります。入口で感じたものが実際にあることに気づくでしょう。しかし、そこで見たものは、何かちょっと違うものです。例えば、教会の入口からロウソクの小さなともしびを見たとき、そのほのかな輝きに引き寄せられて、教会に入ります。そうしたら、本当に火のついたロウソクが見えます。とても安心するでしょう。でも、何かが違う。見慣れたロウソクのともしびですが、何か違う雰囲気の中にある。よく見たら、テーブル状の祭壇があった。そこで気がつくのではないのでしょうか。「あっ、ここは聖なる場所だ」と。

教会は神秘です。その神秘の端っことは教会の外からも見えます。しかし、教会の中に入ればもっとも見えます。そして、さらに教会の中を進んでいけば、もっとはっきりと見えてきて、信じるようになります。

今日の福音の「あの亜麻布があるのを見た」(5節参照)は何げない一節かもしれませんが、わたしたちに、教会にある神秘の一端を垣間見せてくれるのです。